浮島湿原の調査（第一年次）をおえて

成田新太郎

はじめに

「神代の昔、男体大雪山の精と、女体天塩岳の精が悲恋に泣いて姿見の沼をつくり、また想いを通わす浮島をつくった。」先人たちは、浮島をこのように伝説の中でいっている。

私たちは故郷に大雪をもち、この浮島をもつ町民である。私たちはこの自然に恵まれた中で自分達の足元をしっかり見つめ、学習すべく今回、浮島の総合的な調査をおこなったわけである。

しかし、さまざまな制約や資料の不足、時間の絶対量などから、不充分な第一年次に終った。

今後、会としては長期的な展望にたって充分納得のいく結論がでるまで継続していくつもりである。

一、位置・地形

浮島湿原は上川郡上川町の行政区域内、上川営林署第七九林班の事業区に含まれ、東経一二四度五八分、北緯四三度五六分に位置する。石狩川支流ルベシベ川分流ポンルベシベ川を滝の上町よりにのぼった標高約八七二mに東西約二、km南北約一kmに「への字」状に広がる。高層湿原台地である。ここには大小約七つ以上の池溏が点在し、浮島を持つものも数池溏ある。これらは、湿原の成長や形成過程のそれぞれが見られる貴重なものである。なお、池溏の最大は経五一mに及ぶものがあり、水深は岸から直線的に深まり水底は平均化されていて、あまり凹凸が今回の計測ではなく最大二五〇cm、平均八〇～一八〇cmであった。水質はPHで五・六～八・〇で酸性、水温一四～一六・五度で水生昆虫、両棲類がいる。

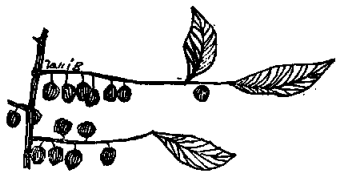
二、附近の地質

一帯の岩石は鮮新世の地層、同期の火山岩類で、笹山熔岩と呼ばれる輝石安山岩である。

基盤岩は、先白亜紀の日高層郡に属する黒色粘板岩硬質砂岩である。これと笹山熔岩との不整合が推定され、柱状、板状節理が発達している。これらの上に湿原植物の堆積で泥炭層ができている。一部の池溏壁で一六〇cm以上の泥炭層内に、火山灰～粘土の介在があることも確認された。

三、植物

湿原をとりまく周辺は一面のチシマザサにおおわれ小低木類、ダケカンバ、アカエゾマツ、クロエゾマツを主とする針広葉樹の混交林であるが、密生はしていない。



湿原植物は大雪山湿原の植物とは大差がないが、標高その他周囲の環境の影響を受け、総体的には若さを保っていると考えられる。つまり、発達しつつある池溏、草原への移行、乾燥地の発展、さらに湿原の拡大などが見られる植生を示している。

今回の調査では、しだ六種、裸子三種、被子二八科七一種、蘚苔九種の確認を得たが、今後の継続調査によって種の拡大が推定されている。

三、動物

今回は鳥類、昆虫の一部を対象として調査を進めた。

鳥類は湿原そのものを生息地としているものはほとんどいない。池溏も水鳥の生息地としては不十分であり、乾燥帯も草原としての性格は薄く面積も少ない。また、カラ、ヒタキ類が多数確認できたこともこれを裏づけている。

帯状センサスで一四科三二種を確認した。昆虫についてはカオジロトンボが多く、蜻蛉目類の幼虫が確認された。蝶類については湿原をとりまく周辺でほとんど確認し、吸水、吸密活動におとずれるものも限られている。

蜻蛉目二科八種、鞘翅目二四科六五種、蝶類六科三七種を確認している。なお、プランクトンは二七科三三種に達している。また、小動物についても確認されているが略する。

おわりに

限られた紙面で報告することには限度があるが、内容の一部の概要でも理解いただければ幸いである。本調査に当って文献・資料の集収が困難であり、調査計画に手間どった。この中で、館脇博士、伊藤博士、梅沢氏の浮島湿原の文献を有効に活用させていただいた。また、関係機関のご援助に心から感謝申しあげたい。さらに直接所轄である上川営林署も当初とちがい、湿原の保護、管理対策に積極的な姿勢を見せていただいたことは、まことに喜ばしいと考えているものである。（上川町自然科学研究会）